プロジェクトM project

# 骨ネジで骨折治療の未来を創る！

## ― 内尾祐司　整形外科への工学的アプローチ ―

冬の朝、目覚めると、木の香りと味噌汁の匂いがする。窓から外を眺めると、昨日から降っていた雪は、もう腰のところまで積もっていた。いつもなら、晴れた日の美しい銀世界を目にして人一倍はしゃぐ少年が、この日は少し憂鬱な気持ちになっていた。

3 話 連 載　第1話

## 「原　点」

**奥出雲**

奥出雲の冬は雪深く、長い。

昔はたたら製鉄で栄え、小説『砂の器』の舞台となった、仁多郡横田町に、昭和37年、整形外科教授の内尾祐司は生を受けた。

ものごころがついたころから、社宅とはいえない長屋の隣の作業場からはいつも木の香りがした。ジャラジャラ、ザクザクというそろばん珠の音の中、数人の職人さんが忙しく手作業をしている。いくつもの工程を経てでき上がった算盤（そろばん）は、指でパチパチとはじかれ、その音は耳に小気味よい。

**ものづくり**

『雲州そろばん』は、国の伝統工芸品で奥出雲から全国に出荷されている。かつては、横田町にはいくつもの算盤工場があり、内尾家もその従業員として働いていた。父は、算盤を作る職人であり、算盤を全国の学校に販売するための販売員でもあった。1年のうち 2/3 は、当時簿記算盤は必修であった商業高校に、算盤を千丁もトラックに積んで工場から届ける仕事をしていた。夏休みには、祐司は父の出張にトラックの助手席に座って、瀬戸大橋もなかった時代、宇高連絡船に乗って四国の高校回りについて行くことが何よりの楽しみであった。

祐司は、この母も事務員として働いている算盤工場の作業場で遊ぶのが大好きだった。職人さんたちはいつもここにいた。

毎日、学校から帰るとすぐに作業場へ行き、ダンボールや余った木を使って、車、船、ロボット、建物などや、ちょっとしたおもちゃを自分で作る。なにかしら完成すると、今度は勢いよく外に出て、近所の子どもたちを集めて、自然の中で実際に動かし、競争させて遊んだ。小さな子には、10 円で買ったパンの耳ばかりの袋からパン切れを渡し、自分で作ったおもちゃをあげて喜ばせた。

こうして、昭和のゆったりとした時は流れ、祐司は、奥出雲の清涼な空気と水と、恵まれた自然の中で両親の愛情を受け、近所の子どもたちのリーダーとして育っていった。

しかし、高度成長期、あの『サンキュッパ』の電卓登場による技術革新の波がくるにつれ、算盤工場の経営は、決して易しいものではなくなってきた。祐司が小学生の頃、すでに家計は苦しかったが、子どもに不自由させまいと懸命に働いていた両親を見ていた彼は、学校で必要な学用品のことも口に出せずにいた。

**父の心**

その年も冬が来て、雪が積もった。朝起きて外を見た祐司は、「ああ、雪が積もっとるけん、体育の授業はスキーだ。でも、スキーの道具がないなあ。授業に出られん。どげしよう。」布団に戻り、しばし考えていると、母から「ゆうじ、起きーだわ。」と呼ばれた。

なんだろう、と思いつつ、しぶしぶ作業場に行くと、そこには、父が座っていた。

「これは？」

「竹で作ったスキー板だ。竹の節も削ってある。竹をあぶってあるから油も出て、よう滑るけん。そろばん工場のモーターのベルトの端切れを輪っかにして足を載せるところにつければ、長靴でワンタッチで入るぞ。父ちゃんの手にかかれば、こんなのはチョチョイのチョイだ。ないものはつくればいい。ちょっと扱いにくいかもしれんが、滑れるけん。授業で使うくらいなら十分だ。」

竹のスキーを学校に持って行くのは少々恥ずかしかったが、祐司は父が手作りしてくれたことを誇りに思って滑った。こうして、祐司は無事、スキーの授業を受けることができた。（難点といえば、エッジがきかず、ジャンプして方向転換しないといけないことと、真竹で作ったストックは輪が無く、いくらでも雪に刺さることだった…。）

学校から帰ってから、

「お父ちゃん、ありがとう。竹スキー、よう滑れたけん。」と伝えると、

「祐司の祐は、天や神さまの助けがある、そして人の助けになるという意味だ。司は皆のリーダーになるということ。”ゆう”の字は裕福の裕じゃなくて、すまんかったがなあ。」

父はそう言って笑い、祐司の頭をなでた。

自然の恵みと、両親の思いやりに包まれた環境で、ものづくりマインドが育まれた内尾祐司の少年時代。次回、青年に成長していく祐司は、どのような道を歩んでいくのか。乞うご期待！

内尾祐司幼少のころ